



スコットランドと北海道～ 竹鶴の足跡をたどる旅

美幌医師会
美幌町立国民健康保険病院

安井浩樹

余市蒸留所でおなじみ、ニッカウキスキー創業者でジャパニーズウキスキーの父、竹鶴正孝がスコットランドへ渡ったのが1918年、昨年2018年はその記念すべき100年後であった。その記念すべき年にスコットランドを旅行する機会を得た。ご承知の通りスコットランドは英国大ブリテン島の北部、広さは北海道とほぼ同じである。旧友のいる港町アバディーンを基点にして、竹鶴が訪れたエルギン、クライゲラヒー、ダフタウンといった、いわゆるハイランド地方スペイサイドの町を巡り、まさに蒸留所巡りの旅であった。ちなみに、エディンバラもグラスゴーも全くルートには入っていないので、札幌、旭川はよらずに、網走を起点に道東を巡ったイメージであろうか。

何だかスコットランドの話をしているのか、北海道の話をしているのか分からなくなってきた。

エルギンで2泊したのが、ライヒモレイホテル、今回の一番のお目当てであった。竹鶴がちょうど100年前に2週間ほど滞在し、ホテル正面の駅から汽車に乗ってロングモーン蒸留所まで通ったホテルである。ロングモーン蒸留所は、竹鶴が初めて見学を許された蒸留所である。ホテルの建物は当時のまま使われていて、竹鶴と同じ部屋だったらどうしようなどと考えてもみたが、増築した快適な部屋であった。ホテル正面の駅舎はそのまま残されていたが、現在駅自体は西に200mほど位置が移動して小さく平凡な駅舎が建っていた。一方、旧駅舎はコミュニティセンターやオフィスとして使用されていた。それでも、切符の窓口らしき仕切りや屋根、ホーム跡の天井の造りは、その建物が駅であったと知らなくとも、煙の匂いや汽笛の音、ホームに佇む竹鶴の姿

を想像するのは容易であろう駅の面影に満ちていた。人影の少ないコミュニティセンターに足を踏み入れてみる。もちろん、駅員や乗降客はいない。扉をくぐったホールにある高い天窓のガラスから降り注ぐ光は当時、竹鶴の希望と不安を照らしたことであろう。ちなみにロングモーンへ行く鉄道はすでに廃線となっており、翌日車で訪れたロングモーン蒸留所のはずれには、当時駅があったことを思わせる、ホームの段差や建物が草で覆われていた。この辺りも、相生線の駅跡や線路跡を歩いているような錯覚に陥る。ロングモーン蒸留所には人影はなく、無造作にならんだ樽の間を歩き回る不審者に、牧場の牛たちが一斉に顔を向けた。

何だかスコットランドの話をしているのか、北海道の話をしているのか分からなくなってきた。

その後も日本でも有名なザ・マッカラン蒸留所、グレンフィディック蒸留所などをめぐり、約6日間のスコットランドの旅を無事終えた。エルギンにあるグレン・モレイ蒸留所で駅に行く道が分からなくなり、通りがかりのおばさんに聞いたところ、ご親切に歩いて駅まで案内してくださった。途中、地域の病院の敷地を抜けて近道をしたのだが、「スコットランドは医者が少ないからね～」とぼやいていた。そんなスコットランドであるが、かつて「ゆりかごから墓場まで」と言われた、英国の医療制度の破綻のあとさまざまな施策により、回復の兆しがみられている。それは、多職種連携チーム医療であったり、医療、介護と福祉の連携であったり、我々が目指しているものとそれほど変わらないように思う。ただ違うとすれば、その意志決定や変化の早さである。90年代に破綻した医療制度が、2000年代に入り制度改革が推し進められており、それは現在も進行中である。スコットランド人からの伝聞としてお聞きいただきたいが、「イングランドより、スコットランドの方がずっと医療制度が進んでいる」そうである。医師不足をバネにして、医師の労力を減らす工夫が実を結びつつあるということであった。

そういえば、スコットランドの話をしていただけなのか、北海道の話をしていただけなのか分からなくなってきた。

いつかそう言えるように頑張っていきたい。スコットランドと北海道にslangevar（乾杯）！



100年前に竹鶴が滞在した、ライヒモレイホテル



エルギン駅 旧駅舎



車窓からみたロングモーン蒸留所